

# 墨の色を愉しむ

仲川恭司

書家・専修大学教授

私が書の世界に足を踏み入れるきっかけになったのは、高校1年生の終わりごろに見た『論經書詩』(鄭道昭)という拓本です。ある日、図書室で、同級生がその本を広げてレポートを書いているのをのぞいたとき、そこにあった文字に無性に惹かれたのです。

高校時代は、音楽、書道、美術のなかから芸術科目の一つを選んで授業を受けることになっていましたが、入学当初はそれほど書道に興味がなかった私は音楽を選択していました。それなのに、中国南北朝時代に書かれた古い文字に、なぜ私の心は動かされたのか。それは、その本に綴られていた文字が、けっして上手に見えなかったことが大きいと思います。偏とつくりがずれていたり、線が曲がっていたりして形が整っていない。それまで学校の習字の授業で教えられた、正しくきれいな文字の概念とまったく違っていたのです。だからかもしれません、一つひとつの文字から力や品格が伝わってきました。

その文字を見て、私はどうしても書を勉強したくなりました。通常、入学



『論經書詩』を前に話す仲川氏。現在でもすぐ手が届く場所におき、ことあるごとに眺めるという。



緊張が走る、古墨を硯で摺る瞬間。指で墨の感触を確かめながら溶くこともある。

時に選択した芸術科目は途中で変えられませんが、担任の先生や書道の先生に変更してもらうようお願いしたのです。そのときに書道の先生から言われたのは「ずっと書道が続けて、将来専門家になるつもりなら教える」ということ。時の勢いでとっさに「やりませう」と答えてしまったのですが、いま思えば私の人生を大きく左右した出来事でした。

『論經書詩』には岩に刻まれた文字が載っているのですが、1987(昭和62)年に、中国を旅する機会があり、実際にその摩崖を見ることができました。感動し、自然に涙があふれてきたのを覚えています。いまでもその拓本を座右におき、ことあるごとに眺めては自分の原点を見つめるようにしています。

書の道を歩み出した高校生のころに私が思ったのは、草書で書いたりして読みにくいのに、漢詩を書くだけの書道では、日本の書道は廃れてしまうということでした。そこから、彫刻や絵



墨の色を確認しながら試し書きをする仲川氏。筆への墨の含ませ方や書き方によって、その色は多彩に変化する。

画のような世界の美術品と肩を並べられる書の内容を書きたいというのが、私の夢になっていきました。

そんなときに出会ったのが、後に私の師匠となる手島右卿(てしまゆうけい)(1901~87・文化功勞者)先生の作品でした。先生の書の造形美と生きた文字に感銘を受け、大学生のころから先生のもとで書を学ぶことになりました。

弟子入りして6、7年経ったあるとき、手島先生から、もっといい墨を使うように、と言われたことがありました。どのぐらいの値段が聞いてみると「50万円ぐらいだな」。当時の私の給料は6、7万円程度でしたから、とうてい買えないと思いましたが、とても厳しい方でしたので、そのときはともかく「は

い」と答えました(笑)。その後、なかなかいい墨と出会えなかったのですが、何年か後に私は1本の墨と巡り会います。清時代の中国の古墨で、小さなものでしたが30万円ほどの値がついていたと思います。当時の私にとっては相当高価な買い物でした。でも、その墨を使うと、やはりいい色が出るんですね。いい墨は、色も格も違うものだと身をもって実感できました。手島先生が私に伝えたかったのは、そのことだったのですね。

いまでこそ墨を見るだけでその善し悪しが判断できるようになりましたが、失敗もしました。なんでこんな墨を買ったのだろうと反省することもしばしばあります。でも、そのたびに審美眼

なかがわ・きょうじ 1945(昭和20)年、新潟県佐渡生まれ。書家。専修大学教授、東京大学教養学部講師。独立書人団副理事長、毎日書道会評議員。16歳で書の道を志し、高校卒業後手島右卿氏に師事。1987年第1回書道大賞新人賞受賞。米国・ニューヨークジャパンハウス、ベルギー日本大使館、イタリア日本文化館、ドイツ・ベルリン市庁舎、米国・サスケハナ大学ゲストハウス、韓国・全羅北道に作品が所蔵されている。共著に『一文字ART』『二文字ART』(ともに日本習字普及協会)など。海外での書芸術普及にも努め、海外の書展への出展は24回に及ぶ。



上 仲川氏が使う墨。摺り口が光沢を帯びている左の墨が油煙墨、艶のないほうが松煙墨。

下 もっともポピュラーな羊毛をはじめ、馬や鶏、兔、山鳥、鹿などの毛を使った筆の数々。10枚ごとに筆を替えながら、作品を書き進めるという。

が磨かれ、本物を見る目が養われた。きっと人から与えられたものでは、そうはいかなかったでしょう。

ただ、どんなにいい墨でも、摺ればいいというものではありません。摺り方に工夫がなければ色が冴えないのです。書の世界に入ったばかりのころは、たとえ先生にいい墨を使うように言われても高価な墨が買えなかった。そこで、安い墨で少しでも自分の納得のいく墨色を出そうと工夫したものです。



左は、中国・明代の古墨「蟠桃核」(松煙墨)をそのまま用いて書いたもの。右は、仲川氏が古墨の色を再生させるために独自に開発した墨「蘇仙」を加えて書いたもの。墨を再生させることで、輪郭線がはっきりと出るようになった。



左が、中国・明代の古墨「甘棠墨」(松煙墨)をそのまま使ったもの。右が「蘇仙」を加えて書いたもの。

たとえば、摺った墨を2、3週間陰干したあと指で溶いてみたり、墨を腐らせる、といったことも試しました。

師匠の影響もあって私は中国の古墨を使うことが多いのですが、墨は時間が経つと炭素化してしまいます。だから再生が必要になる。若いころの安い墨で摺り方を工夫した経験がありますので、古い墨を蘇らせる方法も独自に考えました。

このように実験を重ねながら墨と向き合っていくと、墨の特性がわかり、イメージに近い墨の色をつくれるようになります。墨は単色ですが、なかには落ち着いた色もあれば、明るい色もある。たとえば、作品に合わせて、字

を濃く力強い純黒で書いたり、淡く滲ませてみたり。また、瑞々しく華やかな色や、枯れた響きのある線を出すなど、色や線質を変えて作品をつくっていく過程は、難しくもあり、思わずの



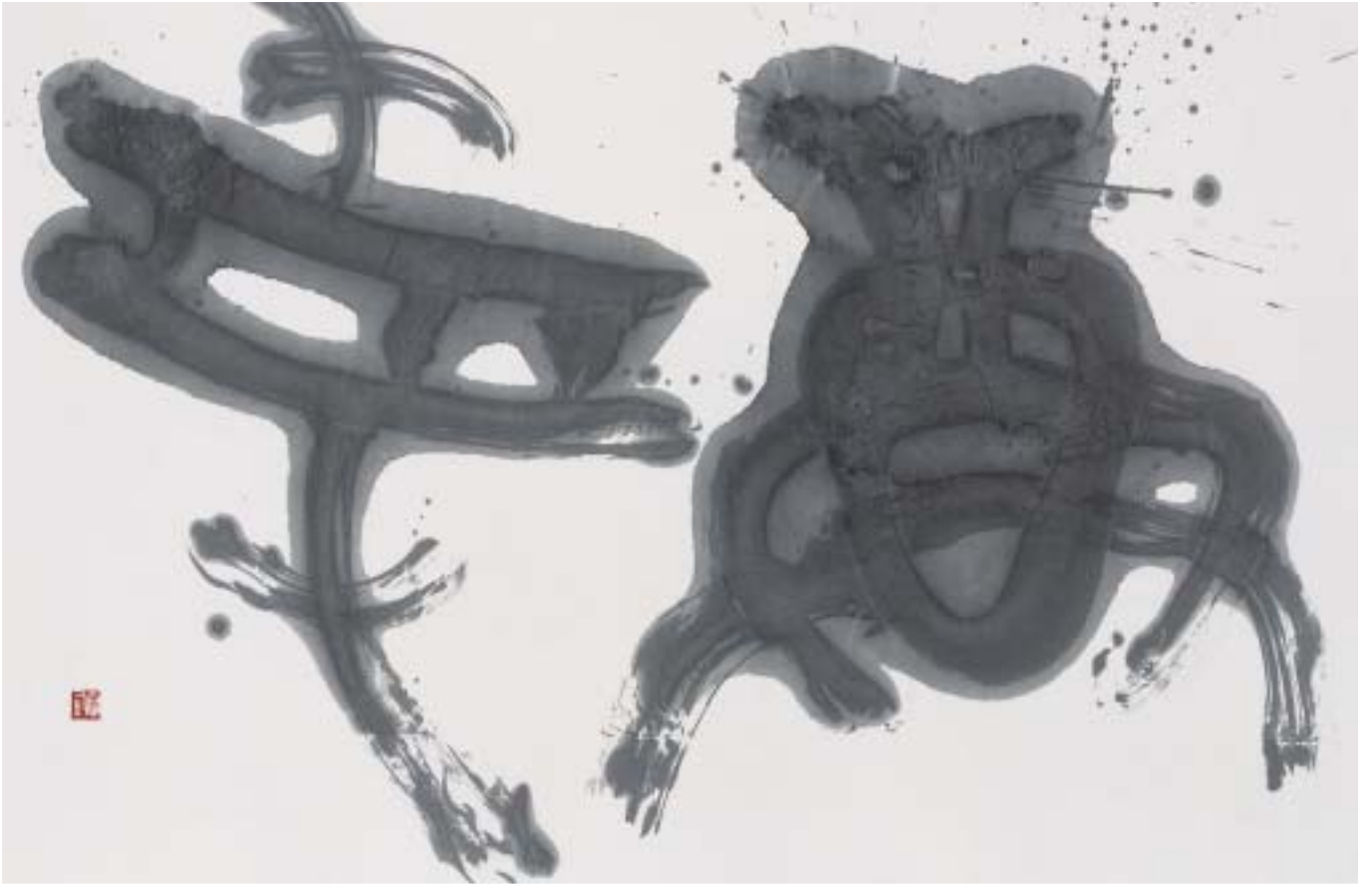
「筆を持ったときの天候や、自分の精神や体の状態、その日の気分など、さまざまな要素が重なり合って、思い描いていた以上の作品が生まれることがあります。そんなときは、まるで潮が満ちるように気持が乗っていきます」と語る仲川氏。

めり込んでしまうほど楽しい作業でもあります。

墨だけでなく、筆づかいも重要です。筆と紙との間に空気を含ませながら書かないと墨が生きてこないからです。筆を空気に触れさせ、呼吸させて書く。そうすることで初めて、人間の手と同じように筆が動きます。もちろん、紙や硯との相性も大切なのはいうまでもありません。筆、墨、硯、紙という文房四宝がうまく組み合わせられて一つの作品が生まれるわけですからね。

書というものは、自分がいままでに体験したうれしいことや悲しいことなど、頭に入っているものすべてが指先を通じて筆に現れてくる総合芸術で





「尊受」2002年 / 114.5 × 174cm



「衆」2003年 / 69 × 70cm



「絶叫(2001年9月11日の衝撃)」2001年 / 177 × 237cm

す。だからこそ人生経験が豊富になればなるほど字に味わいが生まれます。“心”というわずか4画の文字を書くだけで、力強い心や軽やかな心、あるいは沈んだ心、というように、その時々的心境を表せる。幼い子供から年輩の方まで、いつどんなときでも、筆を持

てばその人なりの記憶や人生を投影した文字を書けるのが、書の素晴らしいところです。

また、書道は、字を書くことでその人の人間性を高めたり、精神を高い境地に引き上げてくれる、世界でも希少な芸術でもあります。現在、学校では

授業内容の多様化によって、習字の時間が減ってきています。それは書に携わる者としてとても残念に思っています。もっと多くの人に、そして後世にまで書の素晴らしさを、書作品をとおして伝えていきたいですね。【談】



菜種油に浸した無数の燈芯が燃え、煤が舞う、採煙蔵の部屋の中。

# 墨づくりのふるさと・奈良の 古梅園を訪ねる

純白の紙に冴々と浮かぶ黒い墨文字。悠久の時を経て褪せることのない墨は、その摺り加減によって、幾とおりの色を生む。ときに力強く冴えわたり、ときにはかなく滲む。表情豊かなその色には、眺める人の目を和ませ、心を安らかにする力があるようだ。

墨の歴史を紐解くと、中国の殷の時代(紀元前1500年頃)以前にまで遡る。日本へは、610年、高句麗の僧侶・曇徴が製墨法を伝えたといわれる。その後、奈良時代には、仏教の発展によって膨大な量の写経が行なわれ、墨は貴重品になっていった。

当時、墨は丹波、播磨、大宰府などでもつくられていたが、時代の変遷とともに途絶える産地も多かった。そんななか、現在も日本随一の墨の産地として知られる奈良では、社寺を中心とする需要が高かったため、墨づくりは続いた。ことに奈良時代、藤原氏の氏寺として建立され、栄華を極めた興福寺の二諦坊には、筆記や写経、經典に用いられる墨づくりを一手に担う造墨手が置かれ、膨大な量の墨がつくられていたと伝えられている。

公の仕事だった墨づくりが庶民の手に委ねられたのは室町時代。これが、

奈良に多くの墨商が生まれるきっかけとなった。いまでも、奈良市内には墨を扱う店が20軒ほどあり、ここで全国のおよそ9割の墨がつくられている。その奈良の墨商のなかでも草分け的な存在で、400余年もの歴史を有する奈良墨の老舗「古梅園」を訪ねた。

古くから墨づくりを営んできた古梅園。昔ながらの製法を守り、いまでもすべて手づくりで仕上げる菜種油の油煙墨を主流にしている。

墨には、松煙を原料とした松煙墨と油煙を原料とした油煙墨がある。松煙





古梅園の玄関。看板が年代を感じさせる。



採煙蔵の外観。換気扇から吐き出される煤で、壁も黒く染まっている。



左 採煙蔵の入口付近に置かれた油の壺。  
上 古梅園で使われる油。菜種油のほか、紅花や胡麻、椿などさまざまな油がある。  
下 炎を管理する合間につくられる燈芯。固く細く巻くほど質のいい墨ができる。

墨は、松脂を燃やして採る<sup>すすにかわ</sup>煤と膠、香料を練り合わせてつくられる。一方の油煙墨は、菜種油を燃やして得た煤と膠、少量の香料を練り合わせる。

古来、奈良が菜種の産地だったことから、ここ古梅園では菜種油を使った墨の製法が脈々と守られている。

「昔ながらの手作業の墨には、独特の墨色の風合いがあります。これは、墨汁や墨液では出せません。しかし、奈良には墨づくりを生業にする店は残っているものの、墨汁や墨液が中心のところも多く、固形の墨をつくる店となると数えるほどしかないのが現状です。昔と変わらない技術を持つ職人が減ったことも機械化が進む要因の一つですが、当店では、職人技を伝承しながら、機械まかせにしない、手仕事の墨づくりをいつまでも守っていきたいと思っています」と、古梅園・営業部の竹住<sup>すすむ</sup>さんは話す。

墨づくりの本番は冬。夏場は膠が腐りやすいので11月から4月にかけて行

なわれる。しかし、煤を採る作業は1年中行なわれる。それでも、冬場の作業の分にやっと間に合う量なのだ。

その煤を採る作業場「採煙蔵」の中は、まさに墨を思わせる暗闇。それもそのはず、蔵の中の小さな部屋いっばいに、墨の元となる細かな煤が舞っているのだ。その闇の中に、赤い炎が浮かび上がるように点々と燃える。入口以外の三方の壁に沿うように灯明が等間隔で並び部屋の中央に立つと、まるで別世界に誘われたかのような気持ちになる。森厳な雰囲気をつたえたこの空間で、墨の元となる煤が採取されるの



炎の先が軽く上皿に触れている状態が、煤がもっとも効率よく採れる。

採煙蔵の前で話す古梅園の竹住享さん。



である。

菜種油を入れた土器の皿に、い草でつくった燈芯<sup>とうしん</sup>を浸して灯をとると、炎が触れる上皿に煤がたまっていく。墨師が炎の加減に気を配りながら、煤が均一に付くように20分ごとにおよそ45度ずつ上皿を回す。約2時間かけて一回りするころ、煤がまんべんなくたまる。

「燈芯には、皮をはいで取り出した芯の部分を使いますが、つくるのは案外難しいんです。柔らかく折れやすい芯を何本もよりあわせませんが、固く細く



採煙蔵で採れた煤。粒子がとても細かく、その感触はまるで片栗粉のよう。



墨のもうひとつの原料、膠。これを70度の湯で湯煎し、どろどろになった状態で煤と混ぜ合わせたあと練り上げる。

膠の匂いを消すために入れられる香料。竜腦をはじめ、竜涎香やムスクなど、東洋の伝統的な香料がある。



奥行きのある古梅園の敷地にはレールが伸びる。これで材料や製品が運ばれる。

巻くほど、粒子の細かい質のよい墨になります。また、細かいほど墨色に厚みが出て、表現の幅も広がります。ここでは、芯の太さを4段階につくり分けていますが、微妙な手加減が必要。うまく、そして早くつくれるようになるには、1～2年ほどかかるでしょうか」と竹住氏。

刷毛で集められた煤は、柔らかく、なめらかな手触り。その煤を採る作業は、墨づくりのオフ期間である夏場も続けられる。赤い炎が揺らめく蔵の中は、夏場は50度を超えることもある。容赦なく上がる温度の中で、墨師たちは来る日も来る日も、顔や身体を真っ黒に染めながら、煤と向き合うのだ。

集められた煤は、湯煎でどろどろとした膠の液とともに混ぜ合わせて練り上げる。簡単そうに聞こえるが、ここからが墨づくりの肝ともいうべき作業と、竹住さんは言う。

「煤100に対して、膠60。墨づくりのセオリーですが、実際にはそんな単

純な数字で墨が完成するわけではありません。季節や天候によって微妙に異なる煤のコンディションに合わせて、煤や膠の分量を判断し、練り加減も変えていきます。よい墨ができるかどうかは、この工程にかかっているといってもいいですね。職人の勘と経験にのみ裏打ちされた作業といえます」

煤と膠を混ぜ合わせ、香料を加えると、墨ならではの気品あふれる香りが立ちこめる。古梅園では、常緑の高木である竜腦樹から採れる香料・竜腦を主に使っている。もともと香料は膠の匂いを消すために使われたものだが、摺るほどに香り立つ芳香には、人の心を落ち着かせる効能もある。2000年以上も昔、墨がつくられ始めたころから、すでに墨師たちは精神を安定させる、いわばアロマセラピーのような働きを、香料に見出していたのであろう。

墨をなめらかな光沢が出るまで練り込んだあと、梨の木でつくった職人手製の型に入れ、プレス機にかける。や

文字や模様が開り込まれている木型。梨の木でつくられる。以前は木型をつくる職人は奈良でも1人しかいなかったが、古梅園の墨師が、近年、その技を身につけた。



がて型から取り出した墨を、木灰に包んで乾燥させる。このとき、初めは湿気を帯びた灰に埋め、毎日少しずつ水分の少ない灰の中に移し替える。半月から1カ月間、黙々と続けるこの作業は、急激に乾燥させるとひび割れてしまうデリケートな墨一つひとつを守るために不可欠なのだという。

灰乾燥でおよそ7割の水分が取れば、1本ずつ藁で結わえ、さらに風通しのよい部屋に吊るして、ゆっくりと水分を抜いていく。ここでもまた、ていねいに乾燥させること半月から3カ





左 陰干しされる墨。1本ずつ藁で結ばれ、天井から吊るされる。この状態で半月から3カ月間、ゆっくりと乾燥させる。  
 右 古梅園の製品群。左上より時計まわりに、「金主臣墨」(4丁)2万6,250円、「櫻形」(1丁)3,150円、「聖品」(1.5丁)3,150円、「紅花墨」(5丁)1万5,750円、「梅花墨」(3丁)1万8,900円、「べにばな」(2丁)8,400円、「蒼苔」(1.5丁)3,150円。  
 1丁は15g



創業以来愛されている「紅花墨」を、水を落として硯で摺る。漂ってくる墨独特の香りが心地よい。

店頭に置いてある見本。同じ墨でも、艶のある純黒から茶系や青系の淡墨まで、その色は多彩だ。



陰干しされる墨。軽く触れて起こる、澄んだ金属音が心地よい。

月。完全に乾いたところで、表面についた灰や汚れを洗い流し、表面は棒(はま)の貝殻で磨き上げ、金や銀の彩色を施せば完成だ。幾人もの職人の手を渡り、気が遠くなるほど繊細な作業を経て、ようやく1本の固形の墨が世に生み出されるわけである。

古梅園の店頭には、そうして完成し

た約250種の墨が並ぶ。それぞれの墨の色を示した見本を見せてもらうと、摺り加減によって、淡いグレーから純黒へのグラデーションや、さらには薄茶や青みのかかった色合いまで、実にさまざまな彩りに変わることに驚かされた。

「書道人口は年々減ってはきているものの、墨色百彩と言われるように、無限の色を楽しめる墨独特の色は、時を経てもなお、日本人の心をひきつけてやまない魅力があります。また硯、水、紙との組み合わせで神秘的なまでにその表情を変えていく。書道だけでなく、墨絵や絵手紙などで、現代も墨に親しんでおられる方が多いのはそのためでしょう。書を気軽に楽しむ。そんな習慣がもっと浸透するのが私たちの願いです。」

小学校のカリキュラムから書道の授業が減って久しい。そればかりでなく、かつては学校で、また書道教室でと、

墨に親しんだ世代でさえ墨を摺り、書を嗜む機会のごく限られていると聞いていいだろう。

無心で墨を摺り、墨の醸し出す穏やかな香りと優麗な墨色を眺めて心を落ち着かせる。分刻みの過密スケジュールに追われ、幼い子供までもがストレスを抱える現代人にこそ、心を澄まして筆をとる時間の余裕が必要なのではないだろうか。およそ半年の月日をかけて初めてこの世に生を受ける墨。その黒く光沢を放つ固まりが紡ぎ出す深奥な色を眺めながら、改めてそんな思いにかられた。



古梅園：奈良市椿井町7番地 TEL(0742)23 2965